

# 南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第7号 2014年11月1日

## 目次

ライネルス館とアーカイブズ……………鳥巢 義文……………2

### 南山のコレクション

マリンガー・コレクション—人類学博物館所蔵の逸品—……………黒沢 浩……………3

### 南山発見

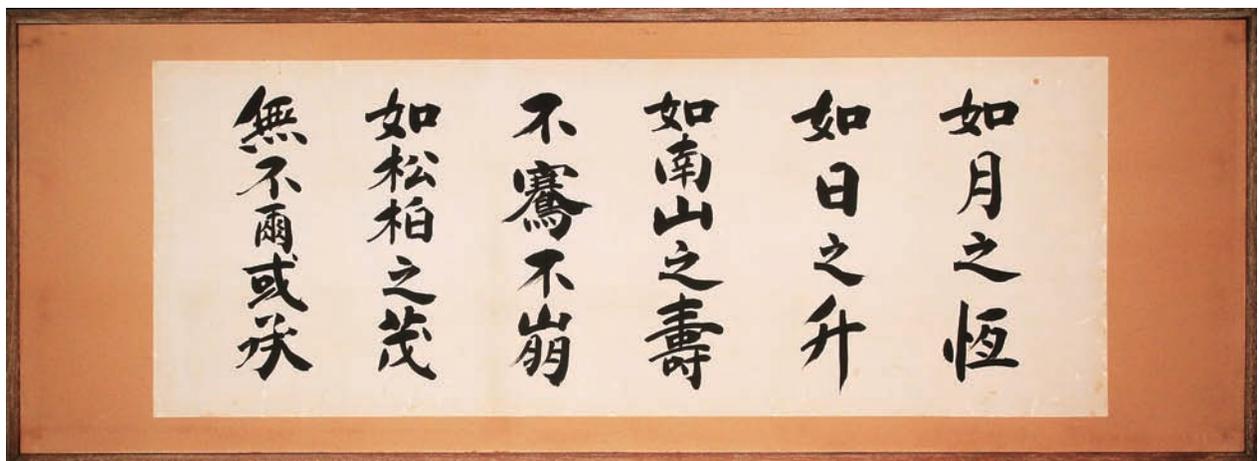
南山学園の戦争遺跡……………永井 英治……………5

「ひと」に触れる展示室に

—子どもにとって魅力的な展示の在り方を探る—……………水越 建太……………8

### 史資料解説

「南山」という名称由来の語られ方……………永井 英治……………9



『詩經』の一篇 南山の名称由来のひとつ（南山アーカイブズ所蔵）

## ライネルス館とアーカイブズ

鳥巢 義文

「木立に囲まれた丘の上に立つ鉄筋コンクリート三階建の校舎は八事線の車窓からも望まれ、明るい近代的な魅力にあふれるその外観は人々の関心を惹いた。小高い位置にあり、かつ背の高いこともあって、各所から見ることのできるランドマークとなった。」

これは、南山学園史を著された和木康光氏が、1932年に開校した南山中学校の真新しい校舎が、当時、地域の人々の目にどのように映っていたかを描いたくだりである（『人間の尊厳のために 南山学園の歩み』学校法人南山学園、2010年6月1日発行、61-62頁参照）。

この学び舎からこれまでに多くの生徒たちが巣立った。戦時中は一時期ではあるが軍の区司令部に利用されたこともあったというが、迷彩色に塗り替えられた校舎が再び元の学び舎として蘇った後は、五軒家町にあるこの校舎から中・高校生ばかりでなく、大学生も数多く卒業して行った。

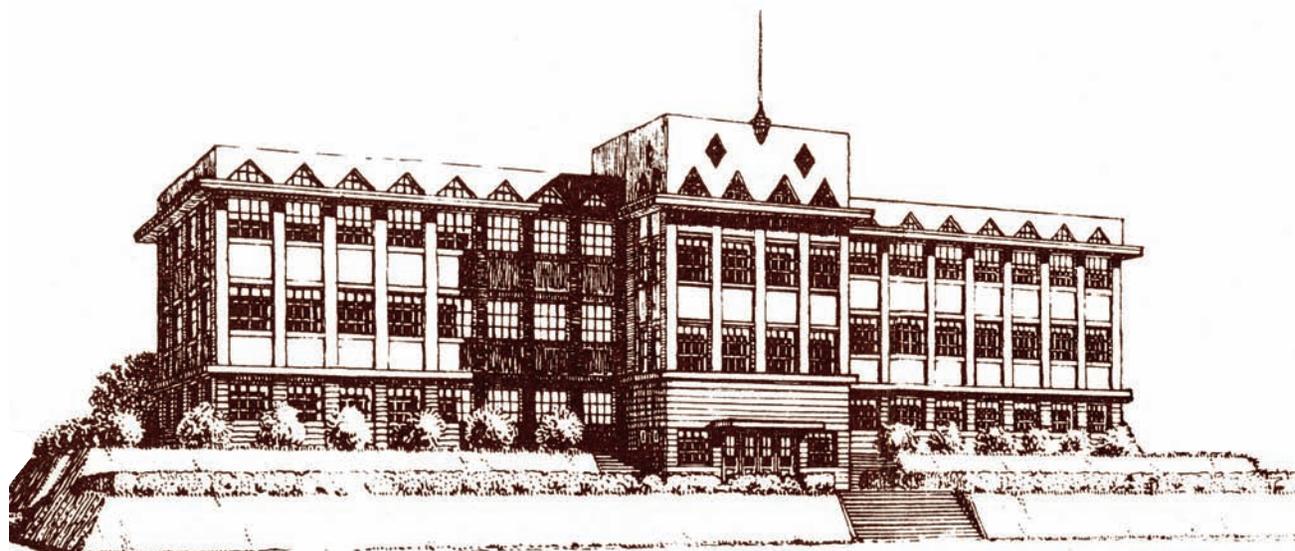
そして今年、数年に亘って準備が進められてきた南山

学園史料室と南山大学史料室との統合が最終的に決まった。2014年9月1日から、両史料室にてこれまで行われてきた諸事業は、学園創設者ヨゼフ・ライネルス神父にちなんで「ライネルス館」と呼ばれる建物の中に設けられる「学校法人南山学園 南山アーカイブズ」が引き続き担っていくことになる。

周知のように、この学園発祥の学び舎の本館部分は、国登録有形文化財指定、名古屋市都市景観重要建築物となっている。そのこともあってか、八事やいりなかの交差点をはじめ、近隣の街並みには背の高い建物が次々と増えるなかで、ライネルス館を取り巻く景観は往時の面影を留めるのに多少なりとも貢献しているようである。

このライネルス館の中に設置される南山アーカイブズも、南山学園の教育事業に関わりを持たれた多くの方々の理解と協力を得ながら、これから将来に向けて、卒業生をはじめとして地域社会の多くの方々に役立つことができると願っている。

（南山アーカイブズ館長）



## マリンガー・コレクション—人類学博物館所蔵の逸品—

黒沢 浩

マリンガー・コレクションとは、神言修道会の神父であり、また先史学者として旧石器時代の研究を手がけたヨハネス・マリンガー神父によって収集された石器資料を指す。このコレクションには、日本の大学や博物館ではほとんど見るできない、ヨーロッパ、アフリカ、アジア諸国の旧石器時代から新石器時代にかけての資料が含まれている。人類学博物館がリニューアルし、全体が触れる展示となった今、このマリンガー・コレクションも実際に触ることができる。手にとった石器が70万年前のものであることを説明すると、たいていの人が、驚きとも感嘆ともつかないような表情をする。それはそうであろう。ほんの数年前の出来事ですら遠い昔のように思えるのに、70万年という時間をどのように感じたらいいのか、ほとんどの人がとまどう。

マリンガー・コレクションが南山大学に寄贈されたのは、1958（昭和33）年のことで、1958年12月19日付の『中部日本新聞』に、「欧州の旧石器 三百点が南山大へ」という見出しで報じられている。また、翌1959年5月25日付の『中部日本新聞』（夕刊）には、「旧石器と人類のあゆみ 公開される南山大コレクション」と題して、南山大学の小林知生教授と名古屋大学の澄田正一助教授（当時）の対談が大きく扱われていて、マリンガー・コレクションの寄贈が、当時は大きな話題となっていたことがうかがわれる。

では、マリンガー神父はなぜ、自ら収集したコレクションを南山に寄贈してくれたのであろうか？それを理解するためには、当時の状況を振り返っておく必要がある。

マリンガー神父は1902年11月8日にドイツのケルンで生まれた。22歳で神言修道会に入り、29歳のときに叙階を受けてからは、各地のギムナジウムで教鞭をとっていたという。そして、このころから先史学に興味を持ち

始めていた。1940年、マリンガー38歳のときにスイスのアントロポス研究所に入所し、先史学・民族学に本格的に取り組むようになり、1942年には「ヨーロッパ先史時代の埋葬慣例における生贄について」というテーマで学位を得ている。

その後、1946年から翌47年までの約3か月間、フランスに行き、当時のヨーロッパにおける旧石器時代研究の泰斗レヴィ・ブリュイ神父やテイヤール・ド・シャルダン神父らと交流し、また遺跡踏査などを行いながら知見を深めていった。実はマリンガー・コレクションの多くは、この時期に収集されたものである。

その後、1952年に日本に派遣される。これは、戦前から日本で活動していたジェラード・グロート神父がオランダの教区に赴任することになり、その後任として職務を引き継ぐためであった。グロート神父も布教活動に携わりながら、一方で考古学の研究、特に日本の縄文時代研究に深い関心を寄せ、千葉県市の市川市で日本考古学研究所を設立・運営していた。マリンガー神父には、布教活動とは別に、グロート神父の研究活動を引く継ぐことも期待されていたのであろう。また、マリンガー神父は、神父としての本来の仕事をししながら南山でも教鞭をとり、社会科学部人類学科の教授も兼務していた。

そのマリンガー神父が日本で活動していた期間は7年足らずであった。1959年には日本を離れ、アントロポス研究所へ戻った。この離日に際して、マリンガー神父は日本考古学研究所を南山大学に移管しようとしたらしい。しかし、南山にはすでに人類学民族学研究所があったため、研究所自体の移設とはならず、日本考古学研究所の資料（グロート・コレクションと呼ぼう）のみが南山に来ることになった。その時に自らのコレクションも合わせて移管したのであろう。それがマリンガー・コレクシ

ョンが南山に来たいきさつである。

マリンガー神父が日本にいた頃は、日本の考古学でも旧石器時代研究が黎明を迎えていた。日本では1949（昭和24）年に群馬県岩宿遺跡の発掘が行われて、旧石器時代の存在が確認されていた。それ以降、日本各地でその時代の遺跡の発見・発掘が相次いでいたが、マリンガー神父は旧石器研究の本場であるヨーロッパの状況を知っているということから、さまざまな助言を求められていたようだ。明治大学考古学研究室が調査し、偽石器であることが明らかとなった青森県金木の調査も訪ねている。

さて、こうしたマリンガー・コレクションであるが、長い間その存在は知られていなかったものの、マリンガー神父が刊行した『先史聚英』で写真が公表されているのみで、実測図もない状態であった。そこで、人類学博物館では2006年度から始まった私立大学学術研究高度化推進事業のオープンリサーチセンター事業の中で、実測図の作成とカタログの出版を行うことにした。また、意外にもマリンガー神父に関するバイオグラフィーがなかったため、マリンガー神父の事跡を跡付けるという作業も行われた。その指導的役割を果たしてくれたのが愛知学院大学の白石浩之教授と名古屋市博物館の川合剛氏であった。

その川合氏によれば、マリンガー・コレクションは、旧石器時代全体を見渡せるように収集されており、研究目的というよりも、教育目的、あるいは普及目的が主ではなかったかと推測されている。確かに、コレクションの内容を見ると、川合氏の指摘通り、前期旧石器時代から後期旧石器時代に至る主要な文化期の石器群を概観できることがわかる。

繰り返しになるが、これだけの石器資料を有する大学、博物館は日本にはない。

南山大学の卒業生の中にも、国士舘大学の沼克彦教授のように、マリンガー・コレクションをきっかけとして旧石器時代研究に進んだ人もいる。それほどに学術的価値の高い資料なのである。

では、マリンガー・コレクションの見どころは何だろうか？見どころと言っても、それは人それぞれと言われるかもしれないが、一つの提案として、これらを人類の進化と関連付けて見ることを奨めたい。日本列島で見つかる旧石器時代の遺跡は、そのほとんどが後期旧石器時代の遺跡であり、その担い手はホモ・サピエンス

であった。しかし、マリンガー・コレクションの中の石器には、われわれホモ・サピエンス以外の人類が作った石器が含まれている。

例えば、バイフェイス（ハンドアックスとも言われる）という石器。この石器は70万年前の前期旧石器時代の文化であるアシュール文化に属するとされるが、この文化の担い手はホモ・エレクトゥスであった（ちなみに、ホモ・サピエンスはまだ誕生していない）。また、中期旧石器時代に属するムスチエ文化やその文化期に発達したルヴァロワ技法と呼ばれる石器製作技術は、ホモ・ネアンデルターレンシス（ネアンデルタール人）のものであるとされている。近年、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人が交配していた可能性が指摘され、ネアンデルタール人がホモ・サピエンスと別種ではない可能性も出てきたが、それでもわれわれ現生人類とはずいぶん違った人たちであったことに変わりはない。

今例に挙げたバイフェイスなどは、70万年前に作られたとは思えないほど形が整い、定型化している石器である。こうした石器を通して、人類の歩みを想像し、そして人間という存在を考えるきっかけとしてもらえるならば、マリンガー神父も喜ぶに違いない。

（南山大学人文学部人類文化学科教授）



## 南山学園の戦争遺跡

永井英治

### はじめに

近年、戦争遺跡に対する関心が高まりつつある。そこには、戦争とくにアジア・太平洋戦争の記憶を持つ人々が高齢となり、戦争を認識する契機として「モノ」に注目していかなければならないという喫緊の事情があるように、戦争遺跡という視点は、固有の目的と分かち難く結びついている。

名古屋市、愛知県にも戦争遺跡があることは、類書に指摘がある。そして、学校にも戦争遺跡があり、南山学園にも戦争遺跡がある／あった。戦争遺跡という表記には抵抗を感じる人たちもいるが、教育の場に即して考えるとき、戦争遺跡という視点は有効である。小文では、まず南山学園の戦争遺跡について紹介し、自校史の中で戦争遺跡を考えることの意義を指摘したい。

### 学校と戦争遺跡

学校と戦争遺跡という組み合わせは、それを不釣り合いと思う感覚こそが適切であろうが、戦争遺跡が現存するか、かつて存在したという学校は、実は少数であるとは言いがたい。その理由のひとつに、1945年8月末の段階で内務省国土局が軍都の文教都市への転換という課題を掲げ、その一環として軍事施設を学校などに転用する国土計画を立案していたことが挙げられる（羽田貴史『戦後大学改革』、1999年、玉川大学出版部）。戦争遺跡という概念も成立していなかった段階であるが、現在の視点からは戦争遺跡と認識される旧軍事施設が学校に転用され、その結果、兵舎などが学校の施設として残されたのである。

あるいは、戦中期における戦争協力を示す歴史的資料

という限定的な意味が、「学校の戦争遺跡」という術語から読み取られるべきと考えるのであれば、戦後設置の学校にはそのような意味での戦争遺跡は存在しないことになる。しかし、前述のような経緯によって学内に残されている／いた旧軍事施設が戦争遺跡として認識される限り、戦後設置の学校にも戦争遺跡が存在しても不思議ではない。

南山学園の場合、1932年に設置された旧制南山中学校は戦争を経験している。生徒は勤労動員によって軍需工場での労働に駆り出され、教員は徴兵によって戦場に赴き、学校教育が事実上不可能となったアジア・太平洋戦争末期、教育が行なわれなくなった校舎は軍が「賃借」することになった。『南山アーカイブズニュース』第6号に写真が掲載されているように、校舎の壁には迷彩塗装が施され、屋上には機銃が設置された。呉市海事歴史科学館 大和ミュージアムなどが協力した防衛施設学会編『海上自衛隊施設などの美しい歴史的建造物(呉地方総監部・江田島第一術科学学校)』（2008年、防衛施設学会）にはレンガ造の建築などが写真によって紹介されているが、もちろん迷彩塗装は見られない。迷彩塗装を施された校舎は、「美しくない」という形容をはるかに超越して、無残であり悲惨である。

敗戦後、この校舎は返還された。迷彩塗装は落とされ、予想以上に傷んでいた校舎は修復されて、1946年9月に開設された南山外国語専門学校の校舎として利用されることになった。さらに1949年4月からは、新制大学として設置された南山大学の校舎として使用された。これが旧制南山中学校の創設者の名を冠してライネルス館と呼ばれる、現在、南山アーカイブズが設置されている建物である。

ライネルス館の現状からは、戦争の痕跡を見出すことは難しい。しかし、この建物がかつて軍事施設に転用されたことは歴史的な事実であり、ライネルス館は戦争遺跡として認識されるべき経験を有している。ライネルス館は南山学園に残る戦争遺跡である。

### 名古屋聖霊学園の戦争遺跡

1995年、南山学園と法人合併した名古屋聖霊学園は、兵舎を転用して教育活動を行なったことから、学校の歴史が始まるといってよい。旧陸軍兵舎を占領軍が接収し、その一部を利用した教育活動の実践が占領軍から打診され、それに聖霊奉侍布教修道女会（聖霊会）が応じ、こうして行なわれた教育実践が名古屋聖霊学園の学校教育として整備されていったのである。これらの詳細は、名古屋聖霊短期大学の最後の学長となった會澤俊三が編集した『南山学園史料集2 名古屋聖霊学園史料集 第一編』（2006年、南山学園）によって明らかにされており、『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』（2007年、南山学園）でも叙述されている。

占領軍による接収兵舎の借用であったことが、借用物件で行なわれる学校教育が認可された背景にはあったのではないと思われるが、それは一方で、占領軍の事情如何により教育の場が失われる可能性を意味した。事実、1951年、朝鮮戦争下で占領軍は一度、校舎の明け渡し要求を決定した。これに対して学校側はマッカーサーへ直接要望書を手渡すため、GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）に出かけた。学校関係者の祈りの中、学校としての継続使用を認める返書が届き、危機は回避された。このようなドラマチックな展開を経て、名古屋聖霊中学校は存続できたのであり、学校の歴史が近現代史と直接に切り結んでいることがわかる。

1961年、拡張されていた校地に新しい校舎が建てられ、兵舎を転用した校舎は取り壊された。その後、名古屋聖霊高等学校・中学校は瀬戸市に移転し、現在、かつての校地に往時の面影はない。しかし、名古屋聖霊中学校の校舎に転用された兵舎は、戦争遺跡のひとつであるにとどまらず、アジア・太平洋戦争の中に明滅した東西対立が戦後の日本社会に与えた影響を如実に示すものであった。とすれば、名古屋聖霊中学校の校舎は、複数の意味

で戦争遺跡であったことになる。すなわち、兵舎の借用提供が学校教育の端緒となったこと、そして、結果としては存続できたものの、一時は借用取り消しによって学校教育が不可能になる可能性を与えたこと、さらに、アジア・太平洋戦争と朝鮮戦争という2つの戦争の結果と展開に大きく関わらざるを得なかったことである。このように、個別学校沿革史は近現代史へと展開していく契機を有しており、直接的な経験を持たない対象を身近なものとして意識させる可能性に満ちているのである。

### 南山大学名古屋キャンパスの戦争遺跡

南山大学名古屋キャンパスのグラウンド西端にかつて高射砲陣地があり、グラウンドの下には破壊されたコンクリートの塊が埋まっていることは、『南山大学五〇年史』などにも記され、比較的知られた事実である。1947年、占領軍が列島全土を撮影した航空写真の中に、現在の南山大学名古屋キャンパスの場所が写っており、そこにも高射砲陣地の跡がはっきり写っている。道幅は異なるが、道路の位置は現在とほぼ変わらないので、南山大学の場所はよくわかる。この写真は国土地理院のWebページでも閲覧でき、『アルケイア—記録・情報・歴史—』第7号（2013年3月）に掲載された坂井信三「建築家アントニン・レーモンドの見た「自然」—山里キャンパス建設をとおしてみたランドスケープ形成の民族誌的研究」でも掲載されている。それらを見ると一目瞭然なのであるが、南山大学の東南角の東隣にも高射砲陣地跡があったことがわかる。

名古屋もかつては軍都であり、とくに戦闘機のエンジン生産では名古屋は重要な拠点であった。この軍都を防御する高射砲は、名古屋の外縁を囲むように設置されており、そのうちの二つが南山大学の東西に置かれていた。将来の南山大学名古屋キャンパス予定地は、東西を高射砲で防御（？）されていたのである。それにしても、この二つは近い。その理由として考えられるのは、名古屋へ侵入する米軍機が、三河湾から北上し、東から名古屋に入る空路である。名古屋に侵入した米軍機は、「南山大学」を通り過ぎた辺りで名古屋の北と南の工場群にそれぞれ向かうので、「南山大学」上空は空の要衝となるのである。

米軍撮影の航空写真を見ると、この二つの高射砲陣地から、それぞれ、東（北）に向かって直線上に、小さなクレーターが並んでいる。米軍機の爆撃によって地面に出来た穴である。ほぼ一直線に並んでおり、高射砲陣地との関係が問われるのであるが、高射砲陣地跡のひとつである見晴台の名古屋見晴台考古資料館の伊藤厚史氏が、関係者に行なったインタビューでは、高射砲陣地が爆撃の対象になったことはないと言われていた（伊藤厚史「H-1号窯付近で検出した爆弾穴と川名山高射砲陣地」『名古屋市見晴台遺跡考古資料館研究紀要』第15号、2013年3月）。しかし、伊藤氏自身がその可能性を完全には否定できないように、現時点では、高射砲陣地と爆撃跡との関係は不明とせざるを得ない。ただし、そうであるとしても、高射砲陣地の東に爆撃跡があったこと、そしてそれらが後の南山大学名古屋キャンパス内に位置したことは、航空写真が明らかに示している。

これらの爆撃跡は、ひとつを除き、南山大学建設時に失われた。ひとつだけ残されたクレーターは、現在の弓道場近くにあり、いくつかの写真は、すり鉢状のクレーターが池になっていたことを示している。この「池」については、南山大学で生物学を担当した阿江茂が、南山大学の自然環境について叙述する中で言及しているが（『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立 75 周年記念誌』）、この池も現在は残されていない。高射砲陣地跡も爆撃跡も、今となっては失われた戦争遺跡である。これらの戦争遺跡破壊を結果した南山大学新設の総合プランをデザインしたのは、木造家屋をいかに効率的に燃やせるかの実験のために日本家屋を再現したアントニン・レーモンドであった。戦争の爪痕は、彼にとって、残すべきではない忌まわしい存在であったか。

二つの高射砲陣地跡から伸びる直線上に位置しない場所にも、爆撃跡とみられるクレーターが写っている。位置から考えれば、単発の爆撃、もしくは、通常の空路とは異なる攻撃であったと見られる。山手通りに面するその爆撃跡をつくったのはエノラ・ゲイと命名された B29 の改修機、落とされた爆弾は形状からパンプキン爆弾と呼ばれた。この爆弾の通常火薬をプルトニウムに置き換えたのが、長崎に投下された「ファットマン」である。1945年7月26日、ポツダム宣言が発せられたその日、

模擬原爆が名古屋、現在の南山大学名古屋キャンパスのすぐ近くに投下された。

### むすびに

自校教育ないし自校史教育の目的は、多様である。戦争遺跡という視点を加味したとき、自校史は、失われた戦争遺跡について知ることを可能にする。そこで重要なのは、学校の戦争遺跡は偶然そこにあったのではなく、学校という場であるからこそ戦争遺跡が存在したということである。また、ある学校では現在に残されている戦争遺跡としての校舎が学校の発展に正の作用を及ぼしたとしても、同じことが他の学校についても言えるとは限らないことも忘れてはならない。名古屋聖霊中学校の歴史は、この二つの側面を示すものである。こうして、学校



左端に池のようになった爆撃跡が見える。

の戦争遺跡は、自校史から近現代史への展開を可能にするひとつの手がかりとなる。ライネルス館が軍に借り上げられたという事実は、南山学園という個別学校沿革史の中で語られるにとどまらず、アジア・太平洋戦争戦中期における軍事施設の拡大に学校が取り込まれていった事例として紹介されている（川西英通『地域の中の軍隊』『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』、2006年、岩波書店）。

戦争遺跡は、その先に平和が位置付けられている。平和について考える契機もまた多様であるが、自校史を考えることによって、それが身近にあることを知ったとき、戦争をリアルに認識することが可能になるのではないか。そこに「自校」の歴史として戦争遺跡を考えることの意義があるように思われるのである。

（南山アーカイブズ／南山大学人文学部人類文化学科教授）

## 「ひと」に触れる展示室に—子どもにとって魅力的な展示の在り方を探る—

水越建太

南山アーカイブズ展示室リニューアルオープンを控え、現在、より良い展示方法について試行錯誤しながら作り上げていく段階に入っている。私は、小学校に勤務している経験を生かし、より良い子ども向けの展示についてお力になればと思っている。

まず、自校史を学ぶことの意味とは何かを考えると、「南山の教育理念に対する理解と、帰属する学園に対する愛情を育てること」に尽きる。「南山って素敵な学校なんだな」「南山に通うことができてよかったな」と心の底から実感でき、「人間の尊厳の推進者としての自分」の生き方を見つめるきっかけになれば、大成功であろう。

では、そのための展示はどうあるべきだろうか。子どもたちの学び方や感じ方の特性をとらえ、子ども目線で考えていくことが大切である。小学校社会科における歴史学習は、通史的に展開し知識を網羅的に覚えさせる学習ではなく、「ひと」に焦点を当てたトピック学習が主となっている。そのため、展示についても、本校のクラス名にもなっている「ヤンセン」「ライネルス」「パッヘ」の3師をはじめ、南山の歴史を積み上げてきた多くの「南山のひと」の人柄、思いや願いを感じさせるような形であるべきだと考える。

まず第一に、歴史に直に触れることができるような展示ができると理想的である。子どもたちは、視覚だけではなく、五感を総動員してものごとをとらえていく。例えば3年生の「昔の暮らし」の学習では、昔の道具に触れたり、実際に使っていく中で、「冬の洗濯は、手が冷たくて大変だなあ」、「洗濯板の模様にも、昔の人の知恵がつまっているんだな」などといった、実感を伴った学びを通して、「ひと」の工夫や努力・思いや願いを考えることを大切にしている。2013年10月にリニューアルされた南山大学人類学博物館を始め、最近触って学ぶ博物

館が増えてきている。しかし、南山アーカイブズには、「史資料の保管」という最も重要な役割がある。そのため、展示の方法についてはある程度の制限がある。そのことを踏まえつつも、五感を使って歴史に触れられる展示方法についての可能性をいくつか示させていただく。

先日、ライネルス館の中を見せていただいた際に、ライネルス師が実際に使用されていた机が残っていた。この机に触れたり座ったりできると、子どもたちはライネルス師の精神に同化して考えるきっかけになるのではないかと。また、ライネルス館の建物そのものも生かしたい。今までの制服や、机や椅子等を配置し、教室として使っていた頃を再現したような展示の工夫も考えられる。当時を体験する中で歴史を体感することができるとうい。

第二に、作業をする中で学んでいくことができる工夫があると良い。最近では多くの博物館で子ども向けのワークシートが設置されているのを見かける。そこで、歴史的事実を単なる知識として問うのではなく、観察力を伸ばしたり、思考するきっかけになったりするようなワークシートがあると、さらに子どもの学びが深まるだろう。

第三に、今と比較できる展示の工夫があると良い。小学校に関して言えば、戦前の南山小学校と現在の南山大学附属小学校を比べられるような展示が望ましい。子どもたちは、戦前の南山小学校の存在は知っているが、その詳細についてはよく知らない。どこに立地していたのか、どちらの方角に正門があったのか、校舎や運動場の様子はどうだったのか等、地図や再現模型によって視覚的に比較できるとよい。加えて、当時の校歌等、子どもたちにとって身近な史資料を新たに掘り起こしていくことも重要な課題であろう。

以上、子どもの目線からの考えを述べさせていただいた。実際、保管や場所の問題等からかなり難しい部分が

あるだろうが、展示の工夫によって、子どもたちが「南山アイデンティティ」を培うことができ、小学校だけでなく、南山の教育にとってなくてはならない場所になる可能性を大いに秘めている。

(南山大学附属小学校教諭)



南山小学校校舎（1936年）南山中学高校友の会所蔵

## 史資料解説

# 「南山」という名称由来の語られ方

永井英治

1964年11月に刊行された、松風誠人の単独執筆になる『南山学園の歩み』では、「南山（なんざん）」という名称の由来について、①みなみやま＝南山という周辺の地名の音読、②漢詩に見られる「南山」「南山寿」を想起させる、と説明している。漢詩の具体的典拠として挙げられているのは、李白「春日行」と『詩経』である。

ここに見られる名称の由来には二つの特徴がある。ひとつは、学校創立者・団体の名称やそれらに関係する表記を用いなかったことである。これは創立者ヨゼフ・ライネルスと彼が属する神言会が、日本に開設する学校にはヨーロッパ言語に由来する表現やその翻訳を採用せず、学校が立地する地域に関わる言葉を用いたことを意味する。これは、その学校が地域とともにあることを意図したと考えてよいであろう。

いまひとつ、旧制南山中学校とそれを経営する財団法人南山中学校が設置された1932年という段階において、漢詩に由来する単語を用いたことである。南山は中国の地名であるとともに、不変であること、長寿を寿ぐ表現とされる。満州事変の翌年という時空において、南山という名称は、それを考案した人々の意志とは無関係に意味付けされ受容される可能性をもっていたであろう。1932年に発行された『南山』創刊号に掲載された平塚佐吉「南山自讃」は、漢詩に見える南山について紹介しつつ、同時代の中国における日本の行動を肯定する論を示

唆する。

アジア・太平洋戦争の敗戦、さらに学制改革による新制学校への切り換えにともない、校名を変更した学校があったが、南山は校名を変えなかった。しかし、1946年に設置された南山外国語専門学校は、1947年度から名古屋外国語専門学校と名称を変更した。『南山学園の歩み』は、変更の理由を①南山ではどこの学校かわからないという学生からの要望、②名古屋外国語専門学校を名乗る別の学校ができたときの競合への不安、という2点を挙げている。文部省に提出した校名変更の理由書では、①南山は日露戦争の戦跡である「南山」を想起させ、「軍国的色彩」が残っているとの批判がある、②本来は「名古屋南山外国語専門学校」とするはずであったが、名称が長くなるため「名古屋」を削ったが、本当は「南山」を削るはずであった、③将来発展が期待される名古屋の名称を冠した学校の卒業生でありたいという学生の希望、④名古屋では駐留する占領軍と交渉することがあるが、その際、南山ではどこのことか説明を要する、といった理由を挙げている。理由書①の主張を貫徹させるのであれば、1947年設置の新制南山中学校も南山の名称を避けなければならない。また、理由書④は、占領下という特殊な状況では意味を持つかもしれないが、事態が変わればまた校名を変更しなければならない。理由書の主張は、要するに名称変更の希望があつて、そのために考え

出されたとみられる。ただし、南山ではどこの学校かわからないという理由は、現在の南山関係者には残念なことであるが、南山という学校名がよく知られていなかったことを示している。これは、近年でも東海地域以外では南山の名があまり知れていないことに通じる。私の経験でも、関西居住のカメラマンに南山大学の現況写真の撮影を依頼したとき、スケジュールの調整をしなければならぬが、何日間くらいになるのかと聞かれ、話が噛み合わないので尋ねたら、南山大学という名前を聞いて中国の大学と思ったと答えられたことがあった。漢詩に由来する「南山」という名称が、近年までその意味で理解される場合があったのである。

1949年に新制大学として設置された南山大学は、名古屋大学の名称はもちろん使えず、名古屋〇〇〇大学の名称も避けられた。初代南山大学長となるアロイス・パツへは総合大学を構想しており、名古屋〇〇〇大学という単科大学を思わせる名称を付けることはなかったのである。こうして、新制南山中学校・高等学校に用いられた「南山」の名前は大学にも付けられた。

表紙に掲載された漢詩は、『詩経』小雅のうち、天保の篇、第6章にあり、『南山学園の歩み』でも言及されている。向井雲崖による1971年頃の書と伝えられているが、署名や落款はなく、根拠は明らかではない。いつの頃からかわからないが、南山学園法人事務局の理事長室応接室に掲げられていた。最近、南山学園史料室が行なったインタビューでは、倉庫から探し出してきて額に入れて飾ったもので、誰の筆でいつ書かれたか全く不明、またはアルベルト・ボルト理事長、沼澤喜市学長、ロバート・リーマー学長のいずれかと親交のあった書家の手によるもの、ということであった。ここから考えられることは、この漢詩に対する南山の人々の関心が高くなかったということである。かつて私はこの漢詩の出典について尋ねられたことがある。これもまた、南山の名前の由来のひとつである漢詩が、法人事務局内で出典不明となるほど

関心が持たれていなかったことを示す。もちろん、誰もが理事長室応接室に簡単に出入りするものではないし、逆に、見慣れた光景に人は注意を払わないものである。その結果、南山という名称の由来に関する漢詩であるということだけが伝承されてきた。

1968年、『南窓』第12号に掲載されたフーベルト・フラッテン「校名「南山」 われわれの指針と希望」では、南山（みなみやま）という地名に由来することの紹介から始めながら、重点は中国の地名と古典での意味に置かれている。南山中学校が建てられたローカルな地名由来は後景に退き、漢詩の中の表現と、そのもとになった実際の地名が、南山の名称の由来として語られている。

現在も使用されている地名を揮毫しても、「南山」の文字としか認識されないであろう。校名の由来をモノで表現しようとするなら、漢詩を揮毫する方が効果的である。しかし、その揮毫がどう扱われるかによって、由来の語られ方が変化する可能性がある。揮毫との関係は明らかでないが、フラッテンの文章は、地名由来が話の枕になってしまうことを示唆する。揮毫が独り歩きすればなおさらである。表紙写真の漢詩を南山の名称由来に関する史資料として扱うとき、重要なことは、周知の漢詩の意味内容ではない。それはあくまでも基礎的知識であって、考えるべきは、この揮毫が、いつ、誰の意図によってなされ、それを見る人々にどのように受容されたかである。残念ながら、そのほとんどは不明とせざるを得ないが、わずかに考えられることはある。それは、1932年前後に南山という名称が考案されたとき、それを受容する人々の中に読み込まれた特定の思考は、この漢詩を揮毫させた人とそれを眼にする人々には想定されていなかったであろうということであり、たとえ意識されたとしても効果を挙げることはなかったということである。あるいは、漢字文化圏の教養に裏打ちされた名称の由来を改めて認識することで、非西洋の地域にあることを自覚するものであったとすれば、それはそれで次の課題になる。